

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部が、1988年度に実施した調査は、平城宮跡内では、推定第二次朝堂院朝庭域、推定第一次大極殿地区、馬寮東方地区、東院地区など11件（宮北方遺跡を含む）、平城京域内では、左京三条二坊一・二・七・八坪、左京八条一坊六坪などの12件、それに頭塔、西大寺、薬師寺など寺院4件計27件であった（35頁表参照）。以下、主要な調査の概要を報告する。

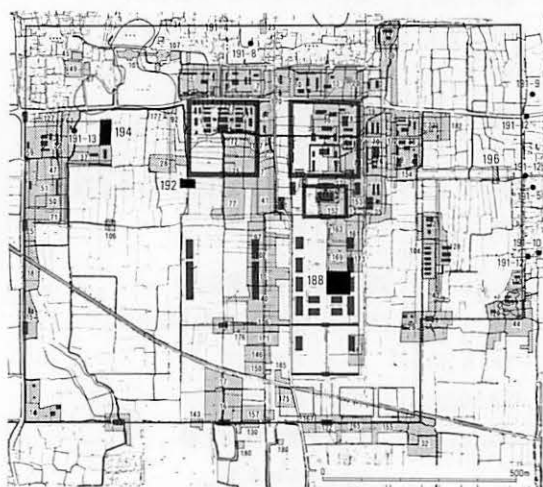
1. 平城宮跡の調査

第二次朝堂院朝庭域の調査（第188次） 第二次朝堂院については、1984年度の第163次調査以来、継続的に調査を行ってきたが、今回は東第三堂西側の朝庭域の調査を行った。その結果、古墳時代から平安時代にかけての多岐にわたる遺構を検出し、この地域の平城宮造営以前から廃都後までの土地利用の変化が明らかになった。以下、遺構の変遷についてのべる。

A期（古墳時代） 古墳の周濠と考えられる方形にめぐる溝状遺構が多数検出されたことから、方墳が散在していたと考えられる。古墳時代には、平城宮北端の市庭古墳、第二次大極殿下層の神明野古墳をはじめとして、この一帯が葬地として利用されていたことがわかる。

B期（古墳時代～平城宮造営まで） 北・西・東の三方を溝SD13317～13319で囲んだ方形の遺構SX13335が存在する時期。SD13319の埋土から四重弧文の軒平瓦1点を含む白鳳時代の瓦片が多量に出土したことから、SD13335は平城宮造営以前の寺院の伽藍に関連する遺構と考えられる。従って、この時期にはこのあたりに寺院が建立されていたと推定できる。

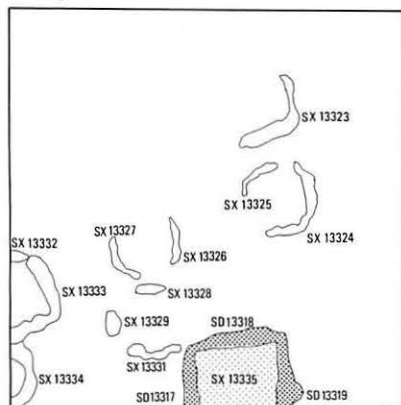
C期（奈良時代） SB13300は東西13間、南北2間の掘立柱建物東西棟。柱間寸法は桁行方向9尺、梁行方向8.3～8.5尺で、西から5間目と9間目に間仕切がある。方位が東で南にやや偏っていること、また柱掘形、柱抜取穴が小さいことから仮設建物であると考えられる。



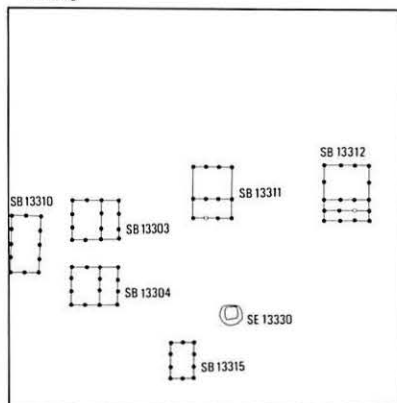
平城宮跡発掘調査位置図

SB13310も東西13間南北2間とSB13300と同じ規模を持つ掘立柱建物東西棟であるが、間仕切が西から6間目、9間目、11間目にある点及び柱抜取穴から軒瓦を含む多量の瓦片が出土した点でSB13300と異なる。SB13300とSB13310の性格については、北側に隣接する第169次調査区で3期の大嘗宮遺構を確認していることから、これに関連する幄舎と考えておきたい。また、前述したとおりの相違点があることから、1回の大嘗祭に2棟建てられたと考えるよりは時期の異なる大

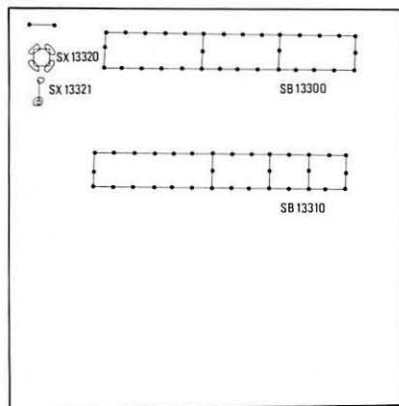
A・B期



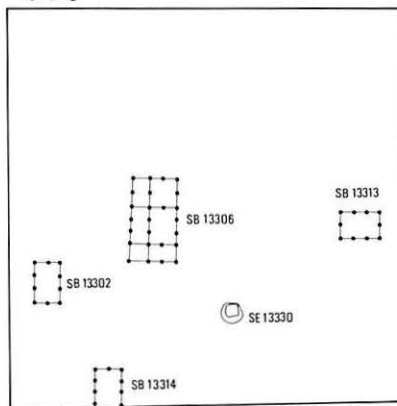
D-2期



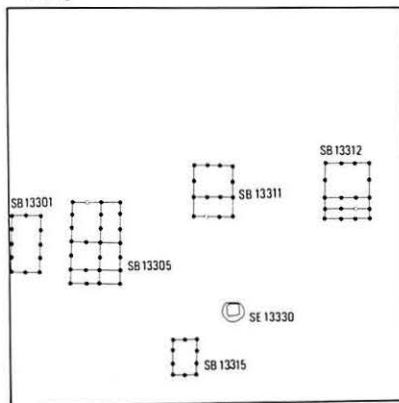
C期



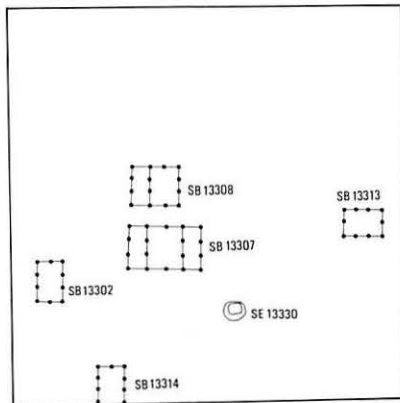
D-3期



D-1期



D-4期



第二次朝堂院朝庭域の遺構変遷図

嘗祭にそれぞれ1棟ずつ建てられたと解釈する方が自然であろう。もっとも、2棟の平面規模や形式が似通っており、SB13310から出土した軒瓦が多く平城宮Ⅲに属することから、両者とも奈良時代後半期の大嘗宮に伴うものと考えるのが妥当である。

SX13320は、調査区北西隅で検出した4つの大型掘形。4つの掘形はそれぞれ国土方眼方位の北に対して約45°振れており、東北と西南、西北と東南に心心間約3mの間隔で相対して位置する。この4つの掘形の中心点は、第二次大極殿・朝堂院の南北中軸線上に位置し、かつ第二次朝堂院の南北長を960小尺に想定した場合、これを南北に二分する位置にあたる。従って、SX13320は朝堂院の建設に際する何らかの構造物の基礎、あるいは地鎮のような埋納遺構である可能性がある。SX13320の南には南北に並ぶ2つの大型掘形SX13321があり、これはSX13320と一体の遺構であろう。また、北約3mには東西方向に並ぶ一対の柱掘形SB13322があり、これもSX13320、SX13321と一連のものである可能性がある。以上が奈良時代の遺構であるが、SB13300、SB13310の建物と大型掘形SX13320が同時期であるかどうかは不明である。

D期（平安時代） SB13301以下計13棟の小規模建物群と井戸SE13330、土坑SK13316が存在する時期。平安時代初期。建物は同程度の平面形式をもつものがほぼ同位置で2時期にわたって重複しており、井戸と広場を取り囲むように存在している。おそらく1つの屋敷を構成する建物群であろう。平城宮廃絶後まもなく、この地に集落が営まれていたことがわかる。

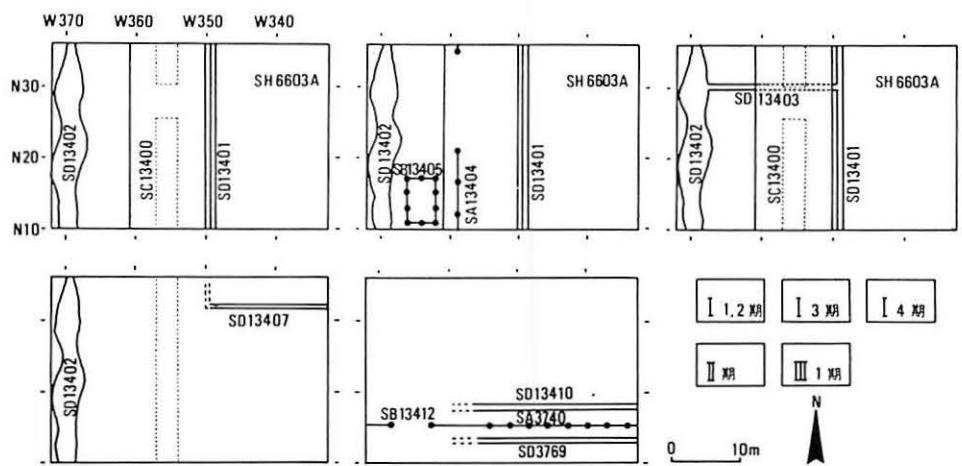
第一次大極殿地区の調査（第192次） 第一次大極殿地区は既に東半部についてほぼ調査が完了しており、その成果は『平城宮発掘調査報告Ⅺ』（1981）として報告している。今回の調査では、第一次大極殿西面築地回廊に調査区を設定し、第一次大極殿地区の中軸線を中心にして西半部が東半部と左右対称に造営されていることを確認した。

前記報告によれば、この地域の遺構の変遷は、Ⅰ-1期（和銅創建時）、Ⅰ-2期（神亀～天平初年）、Ⅰ-3期（恭仁京遷都の時期）、Ⅰ-4期（平城遷都後の天平17年～天平勝宝5年）、Ⅱ期（天平勝宝5年以降長岡遷都まで）、Ⅲ-1期（9世紀初頭、平城上皇の時代）、Ⅲ-2期（天長2年以降）に分けられる。以下、本調査区の遺構の変遷を各期毎に述べる。

Ⅰ-1・2期 この時期の遺構としては、礫敷広場SH6603A、第一次大極殿西面築地回廊SC13400、西面築地回廊東雨落溝SD13401、南北溝SD13402がある。

SH6603Aは殿舎地区と南門SB7801の間に広がり、Ⅰ期を通じて存続した礫敷広場である。西面築地回廊SC13400は、東面築地回廊SC5500を第一次大極殿地区の中軸線で折り返した位置にある。掘込地業を行っているが、SC5500に見られたような中心部の掘り残しは見られなかった。SD13401は西面築地回廊東雨落溝で、東面築地回廊西雨落溝SD3790を中軸線で折り返した位置にある。SD13402は、和銅創建時に掘られ、Ⅱ期まで存続した溝と見られる。

Ⅰ-3期 恭仁京遷都時にあたるこの時期には、築地回廊は取り除かれ、かわりにこの地域を区画する施設として、築地回廊西側柱筋と重なる位置に掘立柱南北塀SA13404が設けられる。これは、東面における掘立柱南北塀SA3777に対応するものである。SA13404は15.5尺等間であ



第一次大極殿地区の遺構変遷図

るが、本調査区の南から3番目と4番目の柱穴の間が3柱間開いており、開口部と考えておく。この開口部との位置関係から、SB13405を一応この時期のものとしておく。

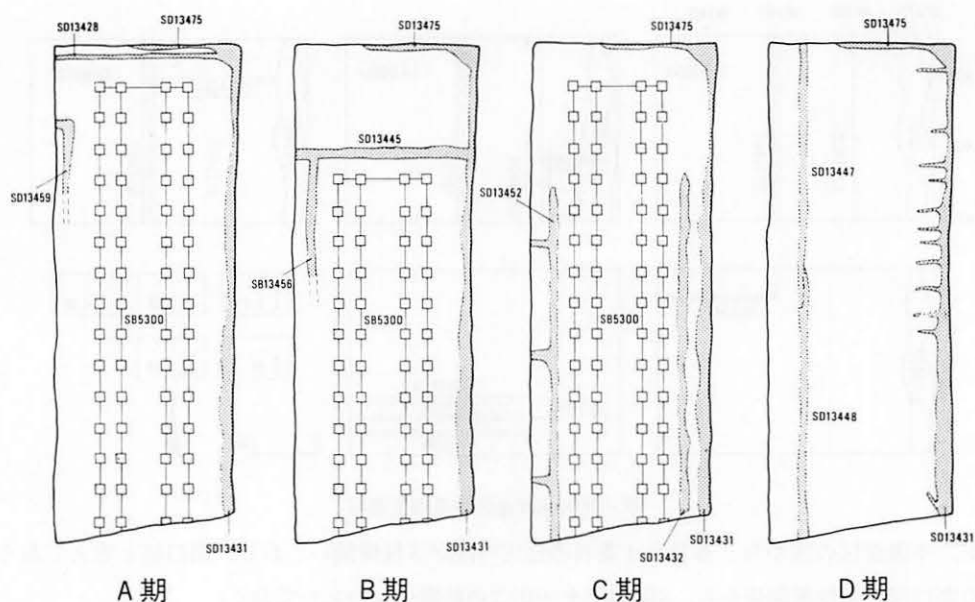
I-4期 築地回廊 SC13400が再建され、それに伴う暗渠 SD13403がある。SD13403は、SD13401を東端とし SC13400をくぐって SD13402に注ぐ東西木樋暗渠で、築地回廊内の水を排水する役割を果たす。これも、東面における東西木樋暗渠 SD3770を中軸線で折り返した位置にある。

II期 この時期の遺構には、東西溝 SD13407がある。この時期の西面築地回廊の状況については、前記報告における東面での見解に従い築地のみが存在したという立場をとっておく。

III-1期 この時期の遺構としては、SA3740, SB13412, SD3769, SD13410がある。SA3740は平城上皇の時期の掘立柱東西塀で柱間は9尺ないし10尺。SB13412はこの塀に開く門。SD3769・SD13410は、塀の南と北に掘られた素掘りの東西溝である。なお、東半部の調査ではSD13410に対応する溝は、確認されていない。

馬寮東方地区の調査（第194次） 本調査区は馬寮地区と第一次大極殿地区の間にあって、佐紀池の西南方に位置する。1967年に実施した第37次調査区は本調査区の南に隣接し、そこでは南北棟の礎石建物 SB5300が南妻柱列から桁行7間まで検出されていた。本調査では、このSB5300の北妻柱列を確認するなど、その規模と構造を明らかにすることができた。以下、SB5300を中心に報告する。

SB5300 東西両面に庇の付く礎石建物の南北棟で、梁行4間、桁行21間（今回の調査で北側15間を検出）である。建物の総長は梁行で12.0m、桁行で86.4m、柱間寸法の平均は梁行で10尺（3.0m）、桁行で14尺（4.1m）である。礎石は残っていないが、柱位置には30個以上の川原石を敷き詰めた根石がほぼ完存している。根石、礎石を据えつけるにあたって独立した掘形を設けず、幅4尺の布掘の溝状掘形を柱筋に沿って通しており、しかも、この掘形では版築が施



SB5300の変遷図

されていない。また、種々の状況から高さ2～3尺の基壇を有していたものと考えられる。

SB5300の存続年代については、出土した軒瓦（軒平瓦102点、軒丸瓦96点）の90%が平城宮Ⅱ、Ⅲで占められていることなどから、奈良時代前半から後半にかけての比較的長期間にわたるものと見られ、その創建は天平年間前半頃と推定される。ところで、SB5300の北妻から3列目の柱筋に布掘を切る東西溝が流れており、出土遺物からその廃絶は平城遷都後である。また、この溝を覆うように2ヶ所で新しい根石が見られ、さらに溝の北側では当初の布掘より新しい遺物包含層を掘り込んで根石が配置されている。以上の点から、SB5300の変遷については、次のような結論が得られる。すなわち、当初は桁行21間の規模であった（A期）が、恭仁京遷都前後の時期に北端の3間が撤去されて桁行18間の規模に縮小された（B期）。しかし、平城遷都後、再び桁行21間の当初規模に回復され（C期）、その後奈良時代後半のある時期に廃絶した（D期）。

SB5300は桁行21間、東西二面庇付きの礎石建物という規模と格式を備えることから、一般的な官衙と見なすことはできず、天皇が御して儀式や祝宴を催した施設の一部であったと見られる。この周辺についての記述のある史料は数点あるが、そのうち『続日本紀』天平10年7月7日条に見える「西池宮」がSB5300の当初建築と年代的には一致しており、それに関係する可能性があることを指摘しておく。

その他の遺構 本調査区では、SB5300のほかに14条の溝と4棟の掘立柱建物、3条の掘立柱塀を検出した。このうち、溝はほとんどSB5300に関連するもので、A期のものとしてはSD13428, SD13459, SD13475, SD13431, B期のものとしてはSD13445, SD13446, SD13456,

またC期ではSD13451, SD13452, SD13432, さらにD期ではSD13447, SD13448, SD13430, SD13476がある。このうちSD13431は建物の東面に関連する溝と考えられ、C期まで存続する。同じくC期まで存続するSD13475は、溝ではなく池の南岸であった可能性もある。

なお、掘立柱建物、掘立柱塀のなかには、SB5300と共存するものもあれば廃絶後のものもあると見られる。しかし、部分的な検出であり、相互の重複関係も皆無であるため、変遷の過程をたどることはできなかった。

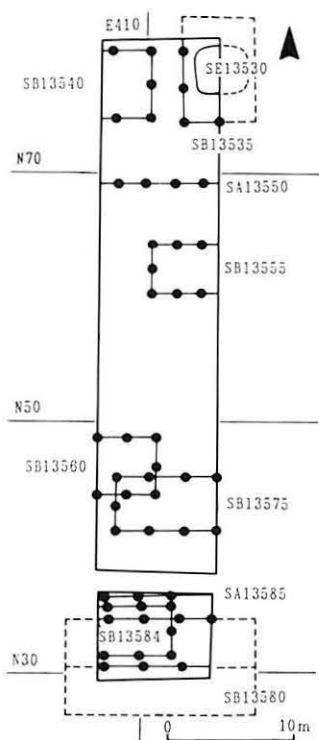
東院地区の調査（第196次） 本調査区は平城宮東院地区の東辺中央部に位置し、第154次調査区（第二次大極殿院・内裏東方官衙地区）の西方約200mの地点にあたる。調査の結果、掘立柱建物7棟、掘立柱塀1条、井戸1基を検出した。しかし、柱穴の前後関係や時期を決定しうる遺物はなく、遺構の変遷を明らかにすることはできなかった。また、第154次調査で検出された東西溝SD11600は今回の調査区までは延びていないことが判明した。

以下、検出遺構と遺物について簡単に述べる。

調査区北部で5間分検出した東西塀SA13550は第154次調査で検出した官衙の南辺を限る掘立柱塀SA11560の延長線上にはほぼ位置し、同一の遺構であるとすれば、この北に官衙の施設が推定される。SA13550の北では、桁行2間以上梁行2間の東西棟SB13540、井戸SE13530、井戸屋形と見られるSB13535などを検出した。また、調査区中央部は遺構が疎らであり、第154次調査における道路SF11580の延長線上にあたることから道路の存在が推定される。この部分から小さな柱掘形をもつ東西棟SB13555を検出したが、道路との前後関係は不明である。調査区南部では、SB13560、SB13575、SB13584、SB13580の4棟の掘立柱建物と掘立柱東西塀SA13585を検出した。出土した土器は、平城宮土器Ⅳ～Ⅴが中心であった。また、軒丸瓦48点、軒平瓦31点が出土し、うち6282-6721の組合せが約半数を占めた。

宮北面中門推定地の調査（第191-4次） この調査地は、北面大垣と、朱雀門・推定第一次朝堂院地区中軸線の北延長線上にあたり、平城宮北面中門の存在が想定されていた。調査の結果、奈良時代初めには掘立柱東西塀（第23次、第164-1次調査で確認されているSA2330と一連のものと考えられる）が想定位置に存在し、少なくとも宮造営当初にはこの位置に門はなかったことが明らかになった。

（小野 健吉）



東院地区遺構図

2. 平城京跡の調査



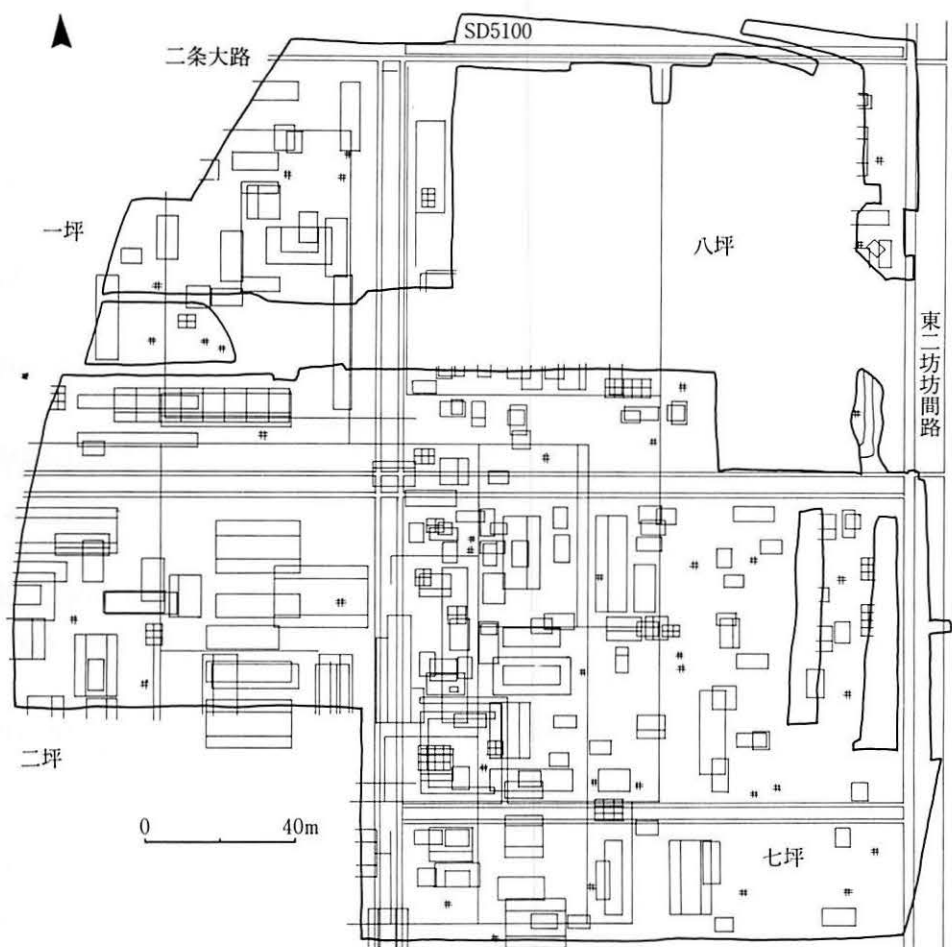
平城京発掘調査位置図

左京三条二坊一・二・七・八坪の調査 この調査は、そごうデパート建設にともなう事前調査であって、1986年度から調査を開始し、本年度は第3年目にあたる。敷地40,000㎡のうち30,000㎡を調査する予定で調査を開始し、現在までの調査面積の合計は30,000㎡に達し、調査はなお継続中である。

本年度の調査区は前年度の調査区の北西に、第186次（北区・補足）・第190次・第195次・第197次調査区を設定した。東二坊坊間路位置には第193次-A・B調査区を、立会調査として第193次-D地区を、南北坪境小路の北延長部分に第193次-C調査区を設定し、木簡が遺棄されたと考えられる南北溝の検出と木簡取り上げを主目的として第193次-E調査区を設定した。北方では、二条大路南側溝位置に第200次調査区を設定した。

以上、本年度の調査総面積は14,830㎡に及んだ。

前年度までの調査成果から、奈良時代の敷地の占地は4町、1町、4町、1町と変化し、出土木簡から奈良時代初期の4町宅地の主が長屋王であったことが確認されている。前年度までに検出した遺構は、長屋王邸宅のなかでは中心部分の建物群に相当すると推定され、今年度の



左京三条二坊一・二・七・八坪遺構図

調査区は、それらの中心区画の外にあたる。したがって、今年度の調査では家政機関に関わる遺構が検出されるものと予想された。調査の結果、今年度までに検出されたおもな遺構は、掘立柱建物208棟、門3棟、掘立柱塀39条、井戸44基、二条大路・同南側溝、東二坊坊間路・同東西側溝、坪境小路2条・同両側溝4条であり、そのほかに多数の溝、土坑を検出した。以下、1986年度からの調査成果を総合して報告する。

A期 敷地は4町占地で、敷地の北方を築地塀で限り、中央に棟門SB5090を開く時期である。敷地の東の東二坊坊間路との境は掘立柱塀で限る。敷地内には掘立柱塀で囲まれた三つの大きな長方形の区画が形成される（以下東から「東区画」「中央区画」「西区画」と呼ぶ）。

東区画内には、区画の中央に、後殿SB4301をともなう四面庇付の建物SB4300が建つ。SB4300は桁行6間、梁行2間の東西棟建物である。その北にある東庇付の南北棟SB4430は西側柱筋をSB4301の西妻柱筋と揃え、南寄りの東西棟SB4270は中軸線を区画の中心におく。中央

区画には、中央北寄りに、南北庇付の大規模な東西棟 SB4500をおき、その東南には、大規模な南北棟を2棟並べている。SB4500は桁行7間、梁行3間の両庇付建物である。そして、西区画では、2棟の両庇付建物がL字形に配される。

区画の北には長大な建物が建つ。SB4800は桁行16間、梁行2間の南庇付きで、2間ごとに間仕切りがあり、内部を8部屋に仕切っていた。また、区画外の東には、南方に菰川から流れる流路があり、その北方には小規模な建物と総柱建物が散在する。

B期 この時期には、東区画が東に拡張されて、南北に並ぶ3つの区画に分割されると共に、中央区画の南が縮小される。そして、敷地の北方も区画堀で囲まれ（以下、東北区画・西北区画と呼ぶ。）敷地内に矩折れの通路ができる。これら区画の改築にともない、東区画では建物が増築され、中央区画でも区画東南に南庇きの建物が新築される。

C期 長屋王の死後、敷地内の区画施設は東北で若干の改修があるものの、基本的には踏襲される。C期では、区画内の建物は、東区画内の建物ではB期の建物がそのまま踏襲され、中央区画・西区画では全面的に、西北・東北区画でも一部の建物が建て替えられる。

中央区画では、正殿 SB4500が壊され、前殿をともなった両庇付建物（SB4600）が建ち、長大な2棟の南北棟も壊されて、中規模な建物が建つ。西区画でも2棟の両庇付建物が壊され、四面庇付建物と南庇付きの東西棟になる。

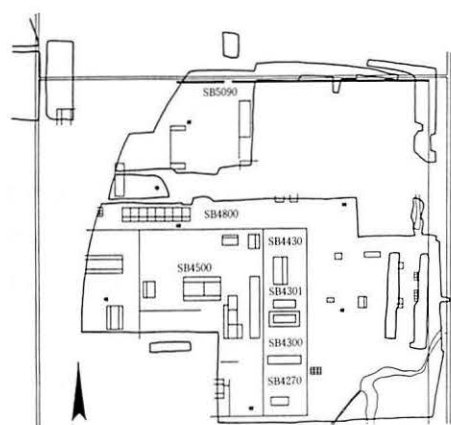
なお、都が平城京から恭仁京へ遷都される直前に、二条大路の南北に一時的に溝が掘られ、そこに大量の木簡・土器等が投棄される。

D期 都が平城京に還都されると、各坪間に坪境小路が通り、4つの敷地に分割される。一坪では、あまり大規模な建物は建たず、敷地内における中心建物は発掘区外にあったと思われる。二坪では、小路との境が掘立柱堀で囲まれ、南北堀で挟まれた3棟の東西棟が敷地の中心的建物となる。SB4550は桁行7間・梁行2間の両庇付東西棟で、その北に、SB4551・SB4581の2棟の東西棟がSB4550と柱筋を揃えて建つ。七坪には敷地南寄りに東西道路が通り、坪内は二つの敷地に分けられる。北側の敷地の西南角には、溝で囲まれた方形の区画が形成されるが、その性格は不明である。敷地内には小規模な建物と総柱建物が散在する。

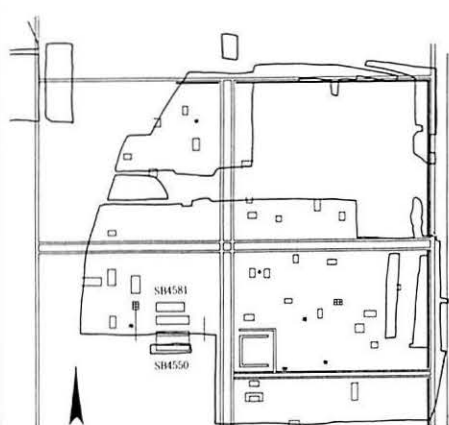
以上のように、この時期は道路が通り、敷地は4分割されるものの、敷地を囲う施設は完備しておらず、この時期はきわめて短期間で終息したと考えられる。

E期 この地がふたたび4町をひとつの敷地として使用され、大規模な建物群が造営される。この時期の中心的建物はSB4566・SB4575の南に存在すると推定され、この付近の建物が敷地内で中心的な役割を果たすと考えられる。そして、それに準じるのが、敷地東南に位置する庇付きの大規模な建物群であろう。いっぽう、中央東寄りには、桁行3間から5間の小規模建物、総柱建物が散在している。敷地の東北にはL字形の堀でかこまれた一郭が形成され、その区画内には中規模建物が建つ。

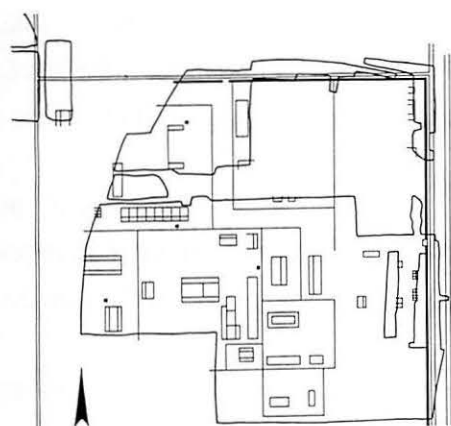
F期 この時期には、再び坪境小路が通されて、大きく4つの敷地にわけられる。一坪では



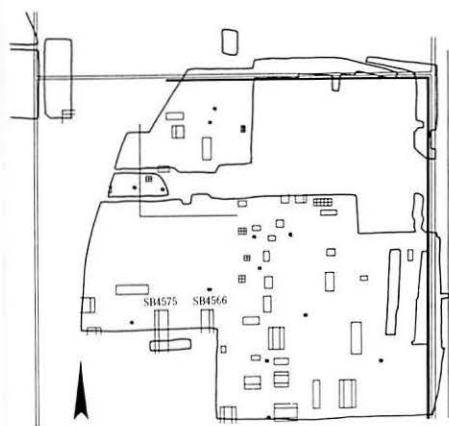
A 期



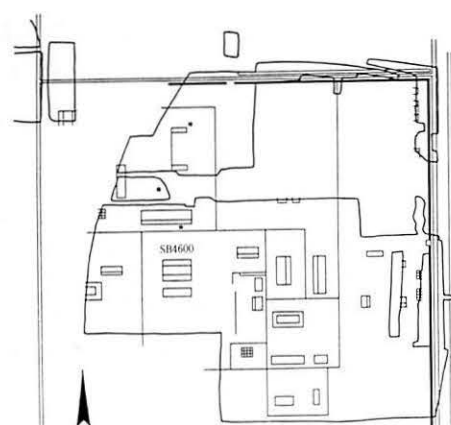
D 期



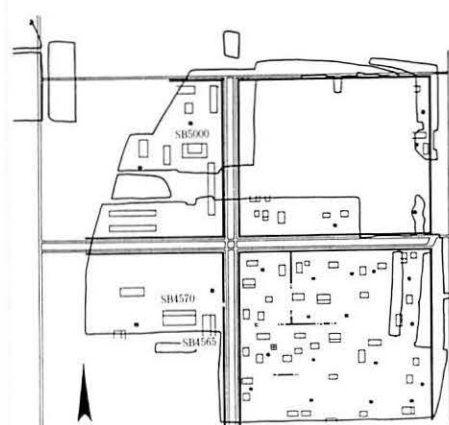
B 期



E 期



C 期



F 期

0 100m

左京三条二坊一・二・七・八坪遺構変遷図

SB5000を中心として、敷地のまわりに細長い建物が配される。SB5000は桁行3間、梁行2間で、東・南・西側に庇が付く。身舎の柱間は桁行・梁行とも10尺等間、庇の出は東・西庇が12尺、南庇が10尺である。二坪の中心建物は中央東寄りに位置する北庇付東西棟 SB4570である。SB4570の東には、SB4570の身舎北側柱筋と北妻を揃えて SB4565が建つ。七坪は一・二坪とは異なり、大規模な建物はなく、小規模な建物と井戸が散在する。井戸は、ほぼ南北4列、東西4列に配され、井戸1基と小規模な建物が2～3棟で、ひとつのグループを形成している。建物の多くは、桁行3間もしくは4間、梁行2間で、庇の付く建物は少なく、柱間は6尺前後のものが多し。したがってこの坪は小規模宅地として細分されていたと考えられる。八坪は中心部分の様相が不明であるが、小規模建物が多い点と、井戸が散在している点から、坪内は七坪と同じく、小規模宅地と化していたと推定される。

条坊遺構 調査区東端で東二坊坊間路およびその東西両側溝（SD4701・SD4699）を検出した。西側溝は溝幅2.0～3.0m、深さ0.9～1.2mである。東側溝は西肩のみを検出しており、溝幅4.0m以上、深さ1.0mである。坊間路の路面幅は5.5m、両側溝の心点距離は9.0mと推定される。西側溝は第193次B調査区において、二条大路を南北に横断することが確認されている。なお、東側溝は、奈良時代を通じて存続するが、西側溝は奈良時代後半に廃絶する。

二条大路南側溝（SD5105）を調査区の北端で検出した。南側溝は幅1.3m、深さ0.6mで、南側溝の北では、それと並行する大規模な溝 SD5100を検出した。SD5100は、西は北門 SB5090のすぐ東からはじまり、東は東二坊坊間路西側溝に流れ込まずに、西側溝の西1.2mで途切れている。溝幅は2.6m、深さ0.9mである。

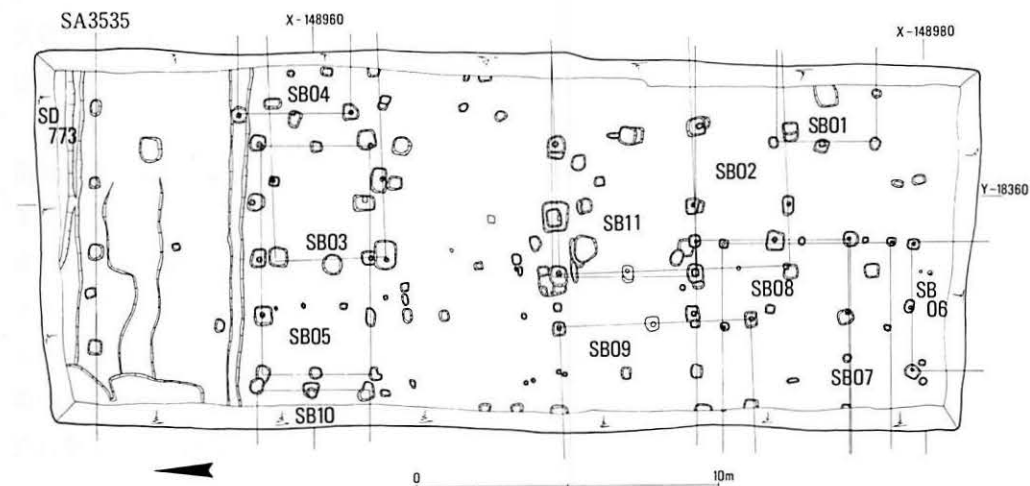
一・二・七・八坪間の南北・東西の坪境小路を検出し、いずれの両側溝ともに、廃された期間を介して2つの時期の遺構があり、いずれも側溝心点距離は6.0mである。

出土遺物 瓦は膨大な量が出土し、とくに二条大路に面した築地推定位置からの出土量は群を抜いている。出土軒瓦の年代はⅠ期からⅢ期が大半である。Ⅰ期の瓦が大量に出土したのは京内の調査としては異例のことである。また、鬼瓦や隅軒平瓦が出土しており、瓦葺建物の存在が考えられる。土器も膨大な量が出土しており、保存状態もよく、伴出した木簡（2頁参照）の紀年から、平城京の土器の編年研究にとって重要な資料となろう。墨書土器では、「官厨」と底部外面に記された土師器碗 A（平城宮土器Ⅴ）が注目される。木器は、溝・井戸を中心に大量に出土し、その内容も食器、容器、祭祀具、工具、装身具、遊戯具など多岐にわたっている。その他にも銅銭や馬具・鏡などの金属製品が出土するとともに、韃羽口・埴塙・鋳滓など鑄造に関連する遺物も出土していることから、邸宅建設時に邸内に鍛冶工房を設けたと考えられる。

まとめ 今年度の調査によって、4町占地の時期における北西部の様相と、1町占地の時期における一坪の様相が判明した。その結果、長屋王邸宅時期には、敷地の北方でも堀による区画が形成されていることが判明した。現在、木簡をはじめ土器・瓦等の膨大な出土遺物の調

査・研究を進めており、その成果をふまえた総合的な検討が今後の課題である。

左京八条一坊六坪の調査（第191―11次） この調査は工場建設にともなう事前調査である。検出した奈良時代の遺構は、掘立柱建物10棟・掘立塀1条・溝1条である。発掘区の北端で検出した東西溝SD773は八条条間路南側溝にあたり、その南の東西塀SA3535は六坪の北を区画する施設である。なお、SD773の南の建物の検出されない範囲に、少量ながら瓦片の散布がみられることから、この位置に築地塀が存在した可能性が高い。この調査で検出した建物は、いずれも柱間寸法が6尺から7尺程度の小規模なものが多い。SB02・SB03・SB09の3棟の軸線は、国土方眼方位に対して北で西に振れるという特徴をもっている。建物はおよそ5時期にわかれる。当地は宅地と考えられるが、発掘区内では宅地の区画割に関わる遺構は検出されず、宅地規模は不明である。（島田 敏男）



左京八条一坊六坪遺構図

3. 京内寺院の調査

西大寺境内の調査 本調査は防災工事にともなう事前調査として実施した。調査区は本堂・本坊の北、本堂の西から愛染堂の東、塔跡の西と南、塔跡から南門間の参道の西、南門の南の配管予定地である。調査の結果、奈良時代の伽藍にともなう顕著な遺構は検出されず、奈良時代以前に遡ると考えられる掘立柱柱穴、奈良時代まで遡ると考えられる性格不明の溝を数条検出したのみである。奈良時代以降の遺構としては、数条の溝（濠）と石組遺構を検出したが、その性格は不明である。遺物としては、奈良時代から近世にいたる大量の瓦が出土した。とくに本堂の北の調査区では、発掘区の東端から中央部にかけて地山直上に50cmから60cmの厚さの瓦堆積がみられた。瓦堆積には層状に焼土が含まれており、火災後に一括投棄されたものと考えられる。瓦堆積からは奈良時代末から平安時代初頭の軒瓦と三彩垂木先瓦が出土した。瓦堆積は奈良時代の西大寺伽藍の塔院の北辺に位置し、延長5・6（927・928）年の塔の罹災後のもの

のと考えられる。西大寺所用軒瓦の様相は、ここ3箇年にわたる調査によって、かなり明確になってきた。これまでは、軒丸瓦6236A-軒平瓦6732K・M・Qが知られていたが、さらに、軒丸瓦では6236H、軒平瓦では6732N・Rをこれに加えることができたほか、6732K・M・Qの良好な資料を得たことも特筆される。

薬師寺回廊の調査 この調査は薬師寺回廊再建に伴う事前調査である。調査区は西面回廊のほぼ中央、金堂の真西にあたり、回廊規模と金堂に取り付く軒廊の有無の確認を主目的とした。調査の結果、従来の調査と同様に、単廊と複廊の遺構が検出された。

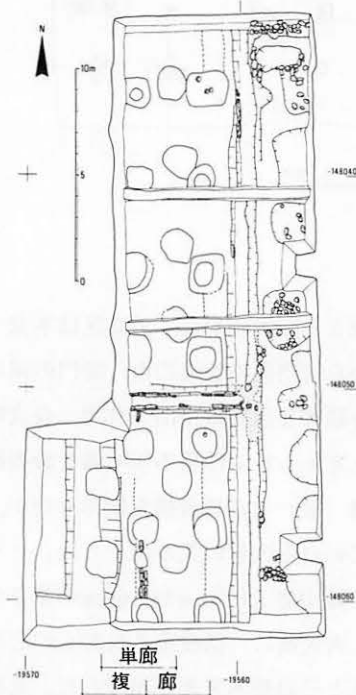
単廊は西面回廊の6間分を検出した。基壇は粘土質の土を版築状に積み、礎石を据えた後に、さらに基壇土を積んでいる。単廊の礎石は据え付けられたものの、基壇外装までは工事がおよんでおらず、複廊への基壇拡張の状況を見ると東側柱心から基壇末端まではおおよそ1.4mと推定できる。礎石据え付け掘形は一辺1.2m～1.8mの方形または不整形で、深さは1mあり、下部70cmに大量の破碎した瓦を入れてつき固めている。なお、据え付け掘形に投入されていた軒瓦はすべて本薬師寺所用瓦と同範である。据え付け掘形の間隔は、桁行方向が3.75m、梁行方向が3.5m強で、計画柱間寸法は桁行12.5尺、梁行12.5尺となる。

複廊は6間分を検出し、基壇と回廊中央柱筋・東側柱筋を検出した。基壇は単廊基壇を拡張し、基壇外装は地覆石を置かず凝灰岩の羽目石を直接地面に立てている。羽目石は幅1.1mまたは0.7m、厚さは0.2m、現状の高さは0.23mである。東雨落溝は、当初は凝灰岩切石製で、東

側石は後に玉石に改修されている。当初は基壇羽目石を西側石として、東側石・底石とも凝灰岩で、溝幅は内法寸法で0.8mである。そして、玉石に改修された後の溝幅は0.6mとなる。東側柱と東雨落溝間の心心距離は約2.0mで、計画寸法は7尺である。

基壇上では壁下地覆と暗渠を検出した。壁下地覆は中央柱筋に2列に凝灰岩切石が並べられており、全幅は0.6m、厚さは0.1mである。暗渠は発掘区の南から3間目に東西に設置され、凝灰岩切石で構築されている。暗渠の内法寸法は幅0.45m、深さ0.45mである。

複廊の礎石はすべて抜き取られており、礎石据え付け掘形と同抜き取り穴を残す。据え付け掘形は一辺1.6mから2mの方形で、深さは中央柱筋で0.4m、東側柱で0.6mである。単廊の場合と同様に掘形内に瓦片を投入してつき固めているが、瓦の量は単廊に比べて少量である。据え付け掘形の間隔は、桁行方向が4.12m、梁行方向が約3.0mで、計画柱間寸法は桁行14尺、梁行10尺で



薬師寺西面回廊遺構図

ある。

以上のように、このたびの発掘調査においてもこれまでの回廊における調査所見と同様に、単廊から複廊への計画変更がみられ、単廊は礎石が据えられ、基壇化粧が完成するまえに、複廊に改作がおこなわれていることが再確認された。今回の調査の目的のひとつであった、金堂にとりつく軒廊の有無については、予想位置に基壇・礎石の痕跡がなく、西回廊東雨落溝が南北に貫通していることからみて、軒廊は存在しなかったものと考えられる。（島田 敏男）

1988年度 平城宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AAU	平城宮 第188次	88.4.1～88.7.20	3080m ²	第二次朝堂院朝庭域
6ABR	平城宮 第192次	88.7.4～88.10.3	1014m ²	第一次大極殿地区西南部
6ACP	平城宮 第194次	88.10.1～88.10.27	3800m ²	馬寮東方地区
6ALD	平城宮 第196次	89.3.1～89.3.27	500m ²	東院地区
6ACN	平城宮 第191-2次	88.4.8～88.4.12	20m ²	平城宮北方遺跡
6ABN	平城宮 第191-4次	88.5.24～88.7.7	400m ²	平城宮北面中門推定地
6ALD	平城宮 第191-5次	88.6.7～88.6.23	90m ²	平城宮東面大垣
6ABN	平城宮 第191-8次	88.11.17～88.11.18	9m ²	平城宮北方遺跡
6ALB	平城宮 第191-9次	88.11.28～88.11.30	25m ²	平城宮東面大垣
6ALC-D・E	平城宮 第191-12次	89.2.4～89.2.8	40m ²	平城宮東面大垣
6ACP	平城宮 第191-13次	89.3.9～89.3.10	6m ²	馬寮東方地区
6AFI-S・T	平城京 第186次	88.4.1～ 89.4.21	3800m ²	左京三条二坊一・二・八坪
6AFI-S・T	平城京 第186次補		1050m ²	左京三条二坊一・八坪
6AFI-S・T	平城京 第190次		2700m ²	左京三条二坊一・二坪
6AFI-U	平城京 第193次		2460m ²	左京三条二坊七・八坪
6AFI-T・U	平城京 第195次		2100m ²	左京三条二坊一坪
6AFI-T・U	平城京 第197次		3460m ²	左京三条二坊一・八坪
6AFI-T・U	平城京 第200次		310m ²	左京三条二坊八坪
6BZT	平城京 第199次	89.2.13～89.4.21	300m ²	頭塔
6AGF	平城京 第191-1次	88.4.1～88.4.15	150m ²	左京三条一坊六坪
6AFM-G	平城京 第191-3次	88.4.15～88.5.17	161m ²	左京四条二坊十六坪
6AGA	平城京 第191-6次	88.6.29～88.7.8	156m ²	右京一条二坊三坪
6AHP	平城京 第191-7次	88.9.19～88.9.21	75m ²	右京九条一坊八坪
6AFK	平城京 第191-10次	88.12.12～88.12.16	50m ²	法華寺旧境内
6AHL	平城京 第191-11次	89.1.7～89.2.7	300m ²	左京八条一坊六坪
6BSD	西大寺 次数外	88.7.20～88.9.20	330m ²	西大寺境内
6BYS	薬師寺 次数外	88.11.30～89.1.11	350m ²	西面回廊